

研究紀要

第22号

方形周溝墓と周溝の覆土と出土状況Ⅱ
－豊島馬場遺跡－

福田 勇

古代武藏国の鉄生産
－箱形炉と竪形炉－

赤熊浩一

古代の官衙や集落と陶硯

田中広明

都幾川下流低地の埋没微地形と遺跡立地（予察）

菊地 真

富士見市内出土石製品の鉱物分析

早坂廣人 大屋道則

火打石小考

大屋道則

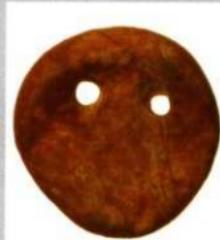
石器材料及び石器の理化学的分析値（2）

大屋道則 上野真由美 新屋雅明 村端和樹 笹森健一
国武貞克 松本美佐子 田村 隆 加藤秀之

2007

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

30 talc	18 talc	31 talc	10 talc	24 talc	15 talc	34 talc
07 talc	11 talc	09 talc	26 talc	27 talc		
12 talc	13 talc	17 talc	03 talc	33 talc clinochlore		
04 talc	05 talc	06 talc	01 talc	08 talc		
16 talc	22 talc	36 talc	29 talc	28 talc		





目 次

序

方形周溝墓と周溝の覆土と出土状況Ⅱ －豊島馬場遺跡－	福田 聖 (1)
古代武藏国の鉄生産 －箱形炉と竪形炉－	赤熊浩 (21)
古代の官衙や集落と陶硯	田中広明 (39)
都幾川下流低地の埋没微地形と遺跡立地（予察）	菊地 真 (61)
富士見市内出土石製品の鉱物分析	早坂廣人 大屋道則 (71)
火打石小考	大屋道則 (81)
石器材料及び石器の理化学的分析値（2）	(91) 大屋道則 上野真由美 新屋雅明 村端和樹 笹森健一 国武貞克 松本美佐子 田村 隆 加藤秀之

都幾川下流低地の埋没微地形と遺跡立地（予察）

菊地 真

要旨 本研究は地理考古学による遺跡立地の研究である。環境考古学という広い視野から見ても、過去の自然環境要素と遺跡や遺構群の関係から、土地開発・変更といった人類活動を復元しようとする試みは少ない。東松山市で最近発掘調査が行われた城敷遺跡をはじめとした低地遺跡は、この問題に取り組む上で恰好の事例である。都幾川下流の高坂周辺に広がる低地下に埋没した微地形を復元し、集落の変遷とあわせて検討を行い、低地性集落の立地についての予察をしたい。

はじめに

先年、東松山市内の低地遺跡（城敷・錢塚・反町遺跡）の発掘調査を担当した際、低地の水田の下に集落が眠っており、木製品など多量の遺物の出ることに筆者は改めて驚きをおぼえた。低地から発見される遺跡は近年増えたが、昔の人々は具体的にどのような条件の土地に住居を構え、水田や畠を設けて日々の生活を営んでいたのだろうか。筆者は環境考古学や歴史地理学について学ぶなかで、かねてより集落立地に興味を持っていたこともあり、低地における集落立地を検討してみたいと考えた。

本稿では城敷遺跡などが立地する東松山周辺の都幾川最下流域における、現在地下に埋没している微地形を復元し、低地性集落の立地について若干の予察を行ないたい。

I 低地における遺跡立地研究の現状

縄文時代以降にあたる完新世の古環境は、海面変動・気候変動や沖積地質への関心から研究が進められてきた。まず沖積低地に関しては、井間弘太郎氏の沖積層研究、大矢雅彦氏が木曾川流域で示した表層地形としての沖積低地の分類などがある（井間1983、大矢1956）。後者は防災上の観点から水害地形分類として採用されたが、いずれも地表面の系統的記載を主とする自然地理学の立場による研究であ

り、その古環境復元に人間活動が考慮されることはない。

これに対して海面変動は、縄文海進と関わるために考古学者の関心も高く、注目を浴びてきた。近年では沖積層の地形・地質や貝類・珪藻などの化石群集の分析から、貝塚形成の自然史的背景を探る研究も進められている（小杉1989、松島2006など）。

このように古環境復元として発達した地形分析の手法が、年代学などの研究とともに、次第に考古学に自然科学的分析として取り入れられてきた。その自然科学的研究は低地の遺跡から始まった。日本では酸性土壌が多く、低湿地でないと土器・石器以外の有機質遺物、自然遺物が遺存しないためである。登呂遺跡や瓜郷遺跡の調査がその初期の例であり（井間1950など）、さらに昭和37年（1962）の鳥浜貝塚の調査や、科研費による共同研究『考古学・美術史の自然科学的研究』（1980）から、考古学者と自然科学者が組織的な共同研究を行うようになったと言える。

自然遺物の分析から古環境を復元し、過去の人間と自然の相互関係を明らかにする環境考古学の研究は、現在に至るまで盛んに行われている（外山2006）。但し主体が遺跡の周辺環境の分析に置かれ、考古学の補助的性格を帯びていたため、分析技術の向上に対する方法論の検討や体系化は進んでいない（I）。

低地遺跡では動植物遺存体の分析など、主に生業に関心が置かれやすいが、土壤など無機質遺物、あるいは立地も自然環境要素として環境考古学の研究対象とされている（加藤1985）。海外ではこれをジオアーケオロジー（Geoarchaeology）、つまり地理考古学と呼んでいる（2）。

地理考古学が対象とする遺跡立地の問題は、日本では早くから歴史・考古地理学として取り組まれてきた。藤岡謙二郎らは過去の人間と自然がつくり上げた景観の変遷を追究しようとしたが（藤岡1970、小野1980）、地理学として地域の特質の解明に重点が置かれ、人間と自然の相互関係は十分明らかにされなかった。日下雅義氏は人間の生活環境としての地形という観点から、過去の地形環境と人間の土地改変などの関係を復原する研究を進めており注目される（日下1980）。

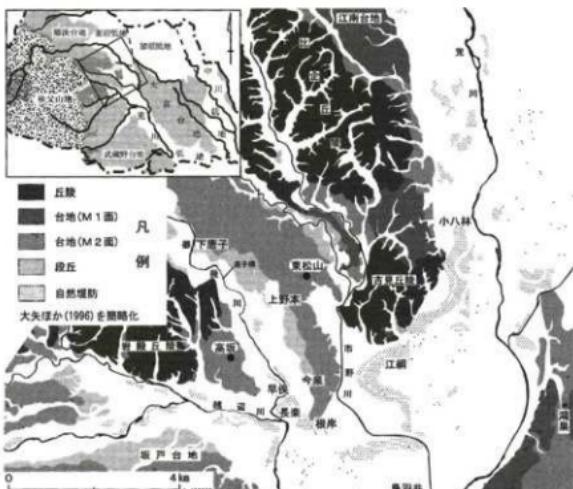
近年の傾向では遺構・遺物の存続期間に即した短い時間幅での環境変化の復元が要求され、10年～10年単位の微地形を分類する技術が開発されている（高橋2003）。高橋学氏の研究は日下氏の地形環境分析を踏まえて、遺跡の発掘調査現場での資料収集を積極的に行い、遺跡の立地する平野の微地形の変遷を詳細に復元している点が特徴である。高橋氏は西日本における縄文時代以降の沖積低地の発達と遺跡にみられる土地開発との関係を明らかにしている。また外山秀一氏も微地形やプランツ・オバールの分析から弥生時代以降の古環境の変化と人間活動について分析を加えている。

低地が出来たのはここ数千年のことであり、その地形を詳しく復元し、低地遺跡の発掘調査から得られた考古資料による情報と重ね合わせることで、人間が低地に何時、どのように進出し、特に生業との兼ね合いからどう土地を開発し・利用してきたのかを明らかに出来ると考えられる。高橋氏や外山氏のように平野の微地形に着目した研究は、東日本地域ではまだ十分に行われておらず、本研究はその点でも意義があるものと考えられる。

本研究では埼玉県東松山市の都幾川最下流域を対象とし、1万分の1の空中写真を判読して洪積台地から沖積低地までを含めた地形分類を行った。空中写真是終戦直後の米軍撮影のものを使用した。判読結果および現地調査の成果をあわせて地形学図を作成し、特に高坂周辺の低地で発見された3箇所の低地性集落の立地について検討した。

II 埼玉の地形と都幾川

1 都幾川の地理的位置



第1図 東松山周辺の地形

都幾川は埼玉県内を南北に縦断している荒川の支流であり、比企郡ときがわ町、秩父山地の堂平山付近を源流とする一級河川である。都幾川は上・中流域で山地内を北東方向に流れ、嵐山町大蔵付近で東秩父村から東流してくる支流の楓川と合流し、より広い谷筋を形成する。

本稿では大蔵以東の都幾川を都幾川下流とし、特に氾濫原が広くなる唐子橋以東を便宜的に都幾川最下流と呼ぶ。都幾川は下流でおよそ南東方向へと流れ、早速で南に大きく曲がって長楽で越辺川と合流する。越辺川はさらに入間川と合流し、荒川低地へと流れしていく。

2 東松山周辺の地形

次に東松山周辺の地形について概観していく（大矢ほか1996）。東松山周辺は比企丘陵、岩殿丘陵が東に大きく張り出し、その周囲に台地・段丘が発達する。比企丘陵、岩殿丘陵は市野川・都幾川・越辺川による開析が進んで樹枝状の谷が丘陵全体に細かく広がっている。比企丘陵の南東端は独立した残丘となっており、吉見丘陵と呼ばれる（第1図）。

比企丘陵の南で北東を市野川、南西を都幾川に挟まれた台地を東松山台地、岩殿丘陵の東端に取り付く台地を高坂台地と呼ぶ。東松山台地は武藏嵐山の苔生から東松山市根岸まで東西に細長く伸びる。標高は20～40mを測り、東西で20m程の比高差をもつ。武藏野面に対比され、約10～8万年前に形成された扇状地性の台地である。台地は東松山駅のすぐ南西を大きく抉られ、また都幾川により西側を侵食されて台地の幅を狭くする。台地上の起伏は小さく、北から南へ緩やかに標高を低くする。

台地の南北両縁には、約5万年前以降の立川面に相当する河岸段丘が発達する。北東側は市野川、南西側は都幾川によってそれぞれ形成された。市野川

沿いは比企丘陵と東松山台地に挟まれて河道幅が狭く、段丘は小規模に発達するにとどまる。都幾川沿いは最下流域が広く開けており、前述した唐子橋付近の下唐子から東へ上野本を経て今泉まで、台地南西縁に幅500m前後の段丘が発達する。台地、段丘では谷による開析はあまり顕著でない。

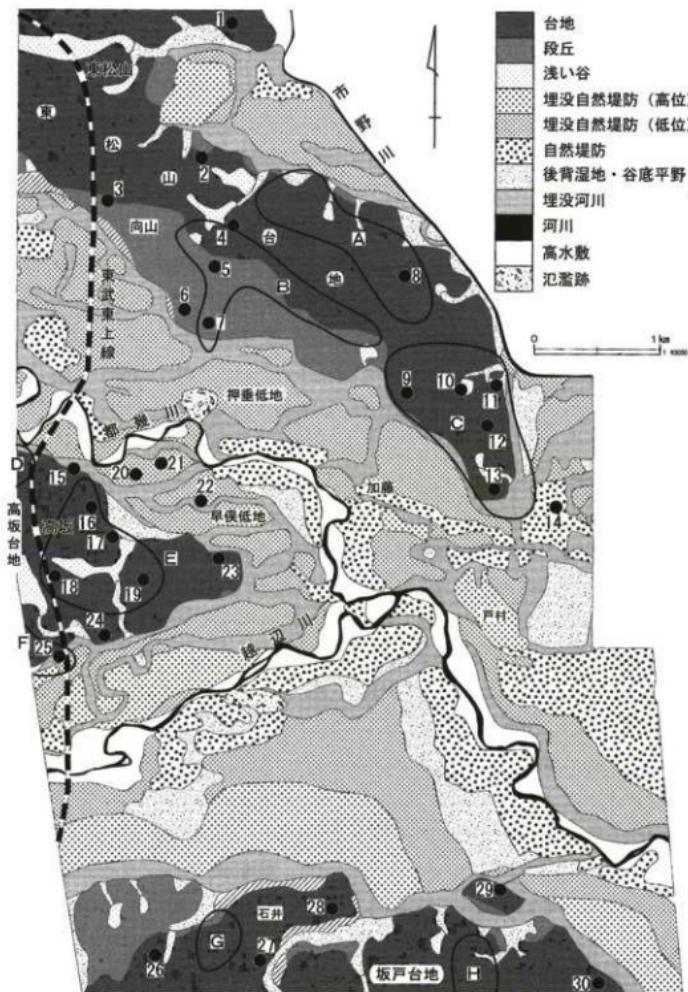
東松山周辺のもう一つの台地である高坂台地は、岩殿丘陵の南東に接続する小規模な台地である。東松山台地と同じく都幾川・越辺川による扇状地性の台地と見られ、河川による浸食により平面三角形状となる。台地上は狭くて起伏に乏しく、谷による開析も進んでいない。

台地から低地へ目を移すと自然堤防が見て取れる。都幾川・越辺川が合流する長楽付近の自然堤防は、東へ延びてより大きな自然堤防とぶつかる。この自然堤防は北は小八林から江綱、鳥羽井と続き、川島町を通過して入間川、毛長川へと至る。蛇行波長が江綱から鳥羽井辺りで4-に達しており、かつての利根川によって形成されたと考えられている（大矢2003）。その形成時期は不明だが、川島町富田後遺跡で縄文後期の遺構が発見されており、縄文前期～中期には形成されていた可能性が高い。

III 都幾川最下流域の地形と遺跡

1 都幾川最下流域の微地形区分

第1図は表層地形区分として優れているが、時間幅としては数千～数万年単位であって、沖積低地における弥生時代以降の発達過程を十分に表してはない。低地遺跡の立地を説明するには地形のより細かな区分が必要である。高橋学氏は5千分の1～1万分の1程度の空中写真判読によって、地下に埋設している旧河道等が識別できるとしている（高橋2003）。今回は低地遺跡周辺の微地形の把握と同時に、少し広い範囲で対比することで地形の分布を押



第2図 都幾川最下流域の微地形分類図

さえ、区分の確度を上げようと考えた。そのため終戦時の米軍撮影の空中写真を用い、2万分の1および1万分の1の縮尺で判読を行った。

判読結果を図化したものが第2図である。台地は台地と段丘に分けられるが、今回は低地に重点をおいたため段丘の細分は行っていない。坂戸台地の石井、松山段丘の向山付近に斜線で示した部分は、低地より高い斜面地で緩やかな傾斜を持ち、明確な平坦面を形成しない。広義には段丘に含まれようが、しばしば指摘されるごく緩やかに低地に向かって傾斜する面（古谷1997）の可能性を指摘しておく。ほかに浅い谷を区分した。これは谷の浸食前線の役割を果たす台地上のごく浅い凹地であり、台地上に比べ、段丘上ではあまり発達していない。

低地の自然堤防は高低差から3面に区分される。高いほうから自然堤防、沖積面（自然堤防I）、沖積面（自然堤防II）である。このうち自然堤防IとIIは沖積面下に埋没している過去の自然堤防である。現在の都市計画図上では、沖積面の自然堤防IとIIは数10cm～1m未満の比高差しかなく、沖積面と現在も人が居住する自然堤防が最大1mの比高差をもつとのとはやや開きがある。沖積面（自然堤防I）は都幾川最下流域には基本的に認められない。都幾川では加藤近辺や、越辺川と合流後の戸村に部分的に広がる。沖積面（自然堤防I）は特に越辺川南岸に広く発達し、沖積面（自然堤防II）とは緩やかな斜面でもって両されており、完新世に越辺川の河岸段丘として形成された可能性が高い。そのためこの3つの地形面は、形成年代の新旧の違いを反映しているとも考えられる。

都幾川最下流域とその周辺には台地上に多くの遺跡が分布するが、低地の遺跡はわずか3箇所（20～22）であり、沖積面の年代を考古学資料から知ることは困難である。自然堤防は集落の形成されるのが

一般に中世以降とされる。沖積面（自然堤防II）は城敷遺跡などの時期から後述するように弥生時代～中世と見られ、調和的な時期を示す。しかし沖積面（自然堤防I）の年代を示す資料を今回筆者が確認していないため、形成年代については今後の検討課題としたい。

また第3図は、高坂周辺を特に拡大したものである。都幾川最下流域の低地は河川を挟んで南北に形成される。ここでは地名から都幾川北岸を押垂低地、南岸を早俣低地と仮称する。早俣低地は沖積面（自然堤防II）、自然堤防、後背湿地、埋没河川から構成される。高坂台地北端に接する後背湿地は現在の都市計画図でも湿地となっており、早俣低地全体で最も標高が低い(3)。現在の早俣集落がのる自然堤防沿いにも後背湿地が認められる。

埋没河川は沖積面（自然堤防II）の間をぬって東西に流れしており、都幾川のかつての流路であると推測される。ただ埋没河川は早俣低地だけを見てもかなり網目状に広がっており、流路の時期的変遷を復元するのは現状では難しい。なお河川としたものは空中写真の撮影された昭和前半の河道を示しており、現在の河道とはかなり異なる。

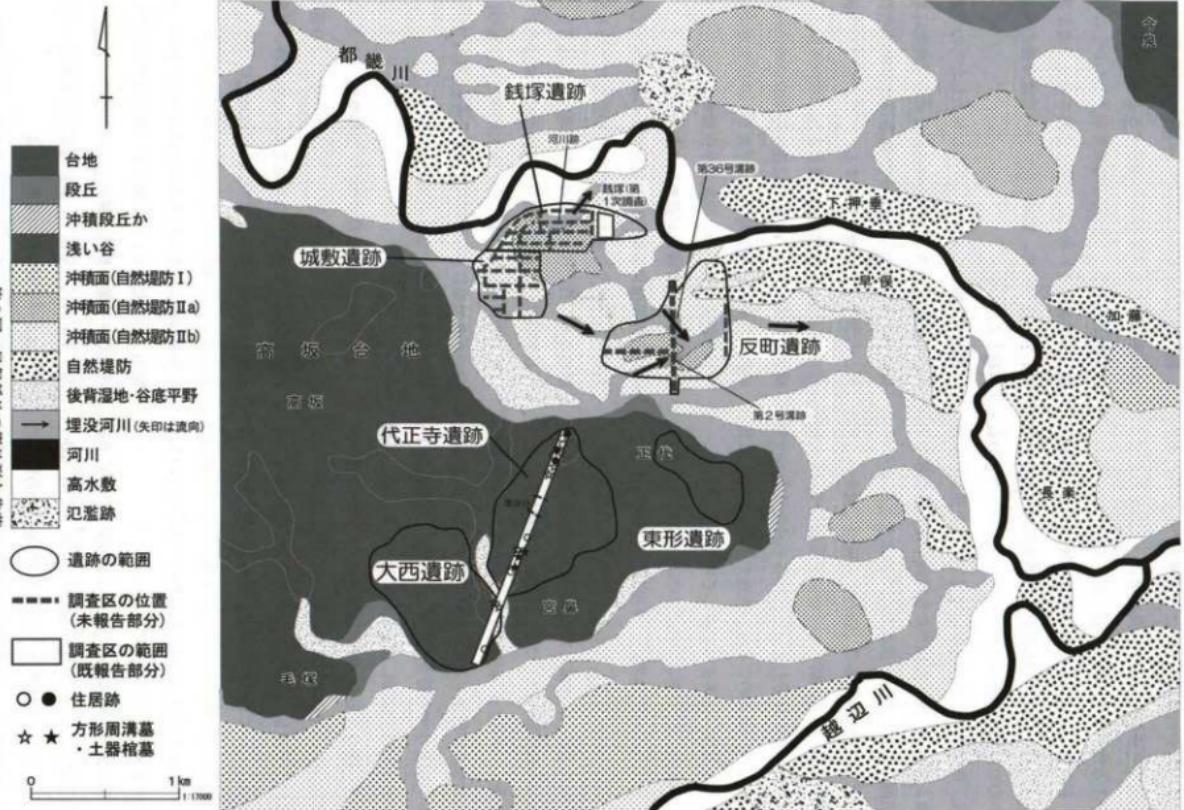
2 早俣低地の埋没微地形と遺跡立地

次にこの第3図をもとに、平成15年度以降の調査により低地で発見された城敷遺跡、銭塚遺跡、反町遺跡の3箇所の集落がどのように低地上に展開していたのか、埋没微地形と立地の関係を検討する。

3遺跡はいずれも早俣低地で確認されており、沖積面（自然堤防II）に立地する。城敷遺跡は古墳時代前期～後期の集落、銭塚遺跡は古墳時代後期～奈良・平安時代の集落で、反町遺跡は弥生中期～古墳後期および平安時代の集落である。

城敷遺跡は6世紀前半以前の柱の掘立柱建物跡

第3回 早良低地の複地地形と遺跡



や、梯子、扉などの建築部材が検出され、初期須恵器を含む古式須恵器がまとまって発見されたことで注目される。錢塚遺跡は奈良時代に一時集落が途絶えるが、7世紀中葉～9世紀の住居跡が多数検出された（富田2005）。古代には城敷遺跡の側は湿地化し水田のあった可能性がある。古墳時代の自然堤防の一部が古代には低湿地化していたという事実は、後述する自然堤防IIにおける局地的な地形発達の時期を考える上で重要である。

また錢塚遺跡の北側では南に大きく蛇行する河川跡の一部が確認された。この河川跡は埋没河川として空中写真判読で明瞭に認められ、都幾川の旧流路の一つであることが確かめられた。発掘調査結果と微地形区分が一致した好例である。時期は平安時代の住居跡を壊していることから平安以降である。上限については、錢塚遺跡第1次調査で中世後半の区画溝や土坑が検出されており（菊地2007）、中世まで上がる可能性も否定できない。

反町遺跡は弥生中期末に集落が形成され、古墳時代中期まで継続する。中期の墓域は調査区内で検出されなかったが、弥生後期から古墳前期にかけて土器棺墓や方形周溝墓を伴う墓域がつくられた。集落は古墳中期まで営まれ、後期には一帯が墓域へと変わり、少なくとも十基以上からなる前方後円墳を伴う古墳群が築かれた。

その反町遺跡では遺跡範囲の中央を幅30～40mの河川跡（第36号溝跡）が縦断し、古墳前期・奈良・平安時代の遺物が多量に出土する。平安以降の堆積層からは巨大な籠や鐵鎌、岸に並べ置かれた土器が見つかり、水に関わる神事が推測されている（菊地2006）。この第36号溝跡も今回、埋没河川として空中写真判読で捉えることができた。第3図にある通り、第36号溝跡は、西の城敷遺跡の方から東へ大きく流れる埋没河川の一部であることが分かる

（図の矢印参照）。この埋没河川も発掘調査で検出された規模から判断して、都幾川の旧流路の一つと考えられる。

またさらに、第36号溝跡のすぐ南で発見された第2号溝についても、空中写真判読で区分された別の埋没河川とはほぼ一致することが確かめられた。第3図の判読結果に従えば、第2号溝跡は第36号溝跡に南西から合流する流路であることが分かる。第36号溝跡は中世前半に埋没しており（菊地2006）、あわせて第2号溝跡の消長が今後注意される。これは早俣低地における都幾川の流路の変遷過程を知る手がかりとなるだろう。なおこれら3遺跡では、他に幅10m以下の流路もいくつか発見されているが、今回の空中写真判読では認識できなかった(4)。

立地において注目されるのは、沖積面（自然堤防II）の微地形と集落の関係である。自然堤防IIはさらに起伏が認められ、高い部分（II b）と低い部分（II a）に分けられる。II b面は北岸の押垂低地を含め、都幾川最下流域で比較的広範に確認され、都幾川の氾濫によって沖積面（自然堤防II a）の後に形成された自然堤防と考えられる。

沖積面上の微地形と遺構群の対応関係を見ると、沖積面（自然堤防II a）上に位置する城敷遺跡では古墳時代の集落が営まれ、沖積面（自然堤防II b）上に占地する錢塚遺跡では、奈良・平安時代の集落が主に営まれている。反町遺跡では沖積面（自然堤防II a）上に主に弥生時代から古墳時代前期の集落が広がり、沖積面（自然堤防II b）上に古墳後期から古墳群が形成されている。すなわち自然堤防II aから自然堤防II bという微地形の変遷に関して、城敷遺跡と錢塚遺跡ではその画期が古墳時代から奈良・平安時代の間に認められ、反町遺跡では古墳時代前期と古墳時代後期の間に認められることとなる。

このように、自然堤防II bの形成が一時期に留ま

らないことはいくつかの問題点を明らかにしている。第一に微地形の細分と地形面对比において、時間的前後関係が無視できない点である。これには遺跡の発掘資料以外に、ボーリング資料から地質の対応や年代資料を得る必要がある。これも本研究の今後の課題である。第二に集落の変遷と、河川の氾濫による微地形の刻々とした変化を関連づけて考察することの重要性である。城敷遺跡などの遺跡の内容は今後の整理作業を待つ必要があるが、集落の遺構群の変遷と自然堤防や後背湿地の形成過程を詳細に対応させることで、低地における土地の選択的開発の実態を知る貴重な事例となろう。

3 低地および台地の遺跡立地と研究の展望

第Ⅰ章でも述べたように、東日本地域では低地における遺跡立地の研究はこれまで活発ではなかった。これは低地の発掘調査そのものが最近まであまり実施されてこなかったところに理由があり、関東でも今後資料が増加することは間違いない。これからの中低地の遺跡立地研究では、以下の諸点が課題となるだろう。

まず一つは、高橋学氏が明らかにしたような平野の詳細な地形発達過程が、同様に関東平野でも復元可能なのか。それに加えて、人間による低地の土地開発がどの時代にどう進められたのか、地形と遺跡との対応関係を具体的に整理することがあげられる。

本研究で検討したように低地の微地形分類は関東でも十分可能であり、それぞれの地形の形成年代を調べ、低地における埋没微地形の幅年を進める必要がある。その際に、錢塚遺跡や反町遺跡で発掘された埋没河川の時期や堆積状況に関する資料は、ボーリング資料のような点の情報よりはるかに優れた面的情報として重要である。埼玉で言えば都幾川のほかにも、旧大里町・川島町周辺の入間川・荒川流

域、荒川扇状地、妻沼低地などは低地の調査例も蓄積されつつあり、今後検討を進めたいと考えている。

またその際に、自然堤防Ⅱbに認められる、河川の氾濫にともなう局地的な地形変化を的確にとらえる視点も求められよう。地形発達史というやや広い視点からすると見落とされ易いが、遺跡の履歴が微地形の履歴とどう関わっていたのかを個別に解明し、地域ごとの人間活動の歴史を復元することが地理考古学の課題と考えられる。その意味において、低地だけでなく同時期の台地の遺跡立地にも注意していく必要があろう。

筆者は特に縄文時代から弥生時代にかけての人間活動の変化を、遺跡立地から読み取ろうと考えている。低地への人類の進出は縄文時代から始まっているが、さらに水田稲作が導入されることで、台地と低地の遺跡には、土地利用、生業のあり方などにどういった変化が起きたのだろうか。

例えば早俣低地に反町遺跡が出現した弥生中期後半～末には、高坂台地上に代正寺遺跡、大西遺跡、東形遺跡が存在する（第3図）。代正寺遺跡は中期後半から後期前半の集落で、大西遺跡は主に後期後半以降の集落である。東形遺跡では軒数不明だが住居跡が見つかっている（北島シンポ準備委員会2003）。

代正寺遺跡、大西遺跡とともに集落の全体像は明らかでないが、代正寺遺跡で少なくとも中期後半の住居跡9軒、方形周溝墓5基以上、大西遺跡では住居跡1軒、土器棺墓2基が発見された（松岡2003）。中期後半の代正寺遺跡は土器から2期に分けられると考えられている（松本2003）。遺構は調査区中央の埋没谷を挟み、1期には北側と南側に住居（第3図の○印。以下同様）が営まれ、北側に居住城に対応する方形周溝墓（☆印）が造られており、2期に

は北側に住居（●印）が引き続き営まれ、南側に方形周溝墓（★印）が造られた。立地という点から見ると遺跡中央の埋没谷の存在が気になるが、調査範囲が狭いため埋没谷が代正寺遺跡の集落を地理的に二分していたかは不明である。埋没谷は空中写真判読で認識できなかったが、遺跡西側の深い谷に連なるものだろうか。だとすれば台地南側への道の存在、大西遺跡との境に位置する谷底平野の利用も推測される。

また1・2期の遺構・遺物を比較すると、住居跡において規模が8m以上の大型住居が各時期1軒ずつ検出されていること、2期の住居跡から土器と共に打製石斧1点と有孔磨製石鏃2点が出土していることが注意される(5)。特に有孔磨製石鏃については及川氏が関東の事例を集成し、狩猟具との見解を示している(及川2002)。これを積極的に評価すれば、代正寺遺跡では狩猟がある程度行われていたと見ることも出来よう。現在反町遺跡の資料が未報告であり、早俣低地における弥生時代の生業の内容は想像の域を出ないが、台地上では畑作や狩猟採集を主とし、低地では水田稲作に従事していたとしたら興味深い。

このように低地遺跡の立地が投げかける問題は、台地を含めた都幾川最下流域の地域をどう復元するかに関わってくる。東松山一帯では、水田稲作の可能な広い低地が早くから形成された点が最大の特徴と考えられる。この地域に早くから弥生時代の遺跡

が集中する意味は、水田開発における低地の資源的価値という所に隠されているように思われる。今後は東日本各地の事例を参照しながら、荒川・中川水系を中心とした関東平野の低地遺跡の立地を復元することが、筆者の当面の目標である。

おわりに

城敷、錢塚、反町遺跡と、財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団在職中に低地遺跡の発掘で貴重な経験をさせて頂いた。本稿では発掘中から感じていた集落立地の問題に取り組み、都幾川最下流域の微地形分類に始まって、低地の集落と微地形との関係を検討してみた。地形的に見て沖積低地は縄文時代後晩期以降にその形成が進むため、この時期以降の研究で低地は無視できない。遺物など考古資料を扱う目も要いつつ、地下に埋没している微地形から集落の土地利用を復元し、人間活動の推移を解き明かしていきたい。

謝辞 2年間の東松山の発掘現場で改めて考古学へと導いてくれた方々、ことに富田和夫氏、大谷徹氏、山本靖氏、福田聖氏の諸先輩に、また日々研究に教示を与えてくれる菊地有希子に、この場を借りて感謝申し上げたい。

本研究は、財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団平成17年度研究助成B「都幾川低地の地形発達史と遺跡立地」の成果である。

注)

- 1) 考古学者の中にも環境考古学を志す者は増えてきているが、最近の『考古学と自然科学』、『環境考古学マニュアル』(共に同成社)等も分析方法の各論が多く、考古学者が過去の人類と環境の関わり合いの歴史を主体的に語れていないので現状である。
- 2) 地理考古学は“Geoarchaeology”的語であり、地球表面の諸現象を復元し、人類がどのように地表を利用していたかを遺跡・遺構・遺物という考古資料に加味しながら考察する研究である。高橋学氏はこれを「地形環境考古学」と呼んでいる(高橋2003)。筆者は歴史地理学との関連も意識して「地理考古学」としている。

- 3) 都市計画図では「荒地」の記号で表記される。記号としての荒地は、利用されず荒れたままになった状態を表し、植生としては雑草や、湿地・沼地に生える水草を表現する。現地でも平成16年時点で湿地であった。
- 4) さらに細かく微地形の遺構の立地について検討するには、5千分の1程度の空中写真判読や現地測量等を行う必要がある。
- 5) 弥生後期では代正寺遺跡、大西遺跡とともに1点ずつ出土。県内で遺構外の出土例が多い中で（村松2001）、両遺跡の例がすべて住居跡出土である点は注意すべきだろう。また時期不明だが代正寺遺跡8号方形周溝墓から鐵形石製品が出土している。

参考文献

- 井関弘太郎 1950 「初期米作集落の立地環境～愛知県瓜郷遺跡の場合～」『資源科学研究彙報』16 pp.6-10
- 井関弘太郎 1983 『沖積平野』東京大学出版会
- 及川良彦 2002 「有孔磨小形尖頭器」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』19号 pp.125-162
- 大矢雅彦 1966 「木曾川下流濃尾平野水害地形分類図」「水害地域に関する研究 第1部」付岡 総理府資源調査会
- 大矢雅彦 2003 「東京低地の形成を考える」『地理』48巻6号 pp.86-93
- 大矢雅彦・高山一・久保純子編 1996 「荒川流域地形分類図」建設省関東地方建設局荒川上流工事事務所
- 小野忠熙 1980 『日本考古地理学』ニューサイエンス社
- 加藤晋平 1985 「総論～人間と環境～」『岩波講座日本考古学2 人間と環境』岩波書店 pp.1-18
- 菊地真 2006 「東松山市反町遺跡（第1次）の調査」『第39回遺跡発掘調査報告会発表要旨』pp.20-23
- 菊地真 2007 「西浦／野本氏館跡／山王裏／錢塚」埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第340集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 北島シンボ準備委員会編 2003 「北島式土器とその時代」埼玉考古別冊7 埼玉考古学会
- 日下雅義 1980 『歴史時代の地形環境』古今書院
- 小杉正人 1989 「完新世における東京湾の海岸線の変遷」『地理学評論』62巻 pp.359-374
- 高橋学 2003 『平野の環境考古学』古今書院
- 富田和夫 2005 「東松山市錢塚・城敷遺跡（第2次）の調査」『第38回遺跡発掘調査報告会発表要旨』pp.14-17
- 外山秀一 2006 「遺跡の環境復原」古今書院
- 藤岡謙二郎 1970 「先史地域の変遷史的研究」柳原書店
- 古谷尊彦 1997 「池之端七軒町遺跡の土壤分析」「池之端七軒町遺跡（慶安寺跡）」池之端七軒町遺跡調査会 pp.271-280
- 松岡有希子 2003 「北島式土器と集落」「北島式土器とその時代」pp.47-68
- 松島義章 2006 「貝が語る縄文海進～南関東、+2℃の世界～」有隣堂
- 松本完 2003 「後期弥生土器形成過程の一様相」『埼玉考古』38号 pp.119-138
- 村松篤 2001 「埼玉の磨製石器」『埼玉考古』36号

研究紀要 第22号

2007

平成19年6月21日 印刷

平成19年6月28日 発行

発行 財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 熊谷市船木台4-4-1

<http://www.saimai bun.or.jp>

電話 0493-39-3955

印刷 株式会社バスコ